

MACF 礼拝説教要旨

2020.11.22

【神との愛の絆は永遠】

ローマの信徒への手紙

8:35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

8:36 「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。

8:37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。

8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、

8:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

+++

パウロのローマの信徒への手紙の前半のそのまた前半の第1部のまとめの文章です。この後、前半の2部が9章から始まります。

1) 引き離そうとする力の存在

パウロは私たちが神の愛から引き離そうとするさまざまな問題について語っています。

そういう力は実際にあるわけですし、そういう問題に直面することが、おそらく何度かはそれぞれの人生の中に存在していると思います。

ここでパウロは「艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」と書いていますが、こ

れらはまさにパウロ自身が経験してきた苦難だったろうと思います。

そして、キリストに従おうと思う人たちの生活の中に、これらのことがもたらされる可能性は少なくありません。

つまり、わたしたちを陥れようとする力は存在しているのです。

2) 引き離そうとする力の現実

パウロは詩編 44 編 23 節を引用して「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書きました。現実問題として福音を宣べ伝えている宣教者たちは、屠場に引かれていく羊のようにみられているとパウロは感じています。

ある種の人間的無力感。どこにも寄る辺がなく、誰を当てにすることもできず、ただ使命として受け取った福音を伝えることだけを

考えて前に進む生き方の中で、「どういうふうに生活するのか」「どこから支援や助けが来るのか」

「家族はどうするのだ」「家は持てるのか」「子供の生活のための費用はどうするつもりだ」などなど、本当に、人々の善意によって支えられ、神様によって支えられてきたから今があるという状況の中で、特に、当時のことを考えると、これらの宣教者は社会に悪い噂を流している、皇帝に反抗するように教えているなどと罵詈雑言を浴びせられ、決して、社会全体から高い評価を受けることがなかったであろう、パウロを初め、多くの宣教者たち。そこには、厳しい現実がありました。

しかし、福音は前進し、私たちのところにまで届きました。

3) 神の愛の力と現実、神との愛の絆は永遠

パウロは言います。

8:37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。

8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、

8:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

これはパウロの理解している勝利宣言です。
でも自分の力の誇りではありません。
キリストの勝利を宣言し、神の愛の勝利を宣言しているのです。
神が主役です。

ここで思い出す記事があります。前にも紹介しましたが、再度登場してもらいます。

+++

「雨にも負けず」

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
慾はなく
決して怒らず
いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と
味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを
自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分か
そして忘れず

野原の松の林の陰の
小さな萱ぶきの小屋にいて

東に病気の子供あれば
行って看病してやり
西に疲れた母あれば
行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば
行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば
つまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し
寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにでくのぼーと呼ばれ
褒められもせず
苦にもされず
そういうものに
わたしはなりたい」

宮沢賢治が「そういうものにわたしはなりたい」と詩の中に書いた人物のモデルとして知られているのが斎藤宗次郎。内村鑑三を看取った人です。その斎藤宗次郎という人は、このような人物だったという文章がありました。
出典が明らかでないのが気になりますが紹介します。

『斎藤宗次郎は、岩手県の花巻に1887年に禅宗の寺の三男として生まれました。
彼は、小学校の教師になりますが、内村鑑三の影響を受けて聖書を読むようになり、洗礼を受けてクリスチャンになりました。しかし、それから大きな戦いのはじまりでした。
当時は、キリスト教は、「ヤソ教」「国賊」と呼ばれていました。彼は洗礼を受けた時から迫害を受けるようになり、石を投げられ、親にも勘当され、小学校の教師を辞めさせられてしまいました。それだけではありません。迫害の手は、家族にまで及んできました。

近所で火事が起きたとき、全然、関係がないのに、嫌がらせで、放水され、家を壊されたことがありました。家の窓ガラスを割られることも何度もありました。

そして、さらにひどいことが起こりました。

9歳になる長女の愛子ちゃんが「ヤソの子供」と言われてお腹を蹴られ、腹膜炎を起こして亡くなってしまったのです。亡くなる時、愛子ちゃんは、讚美歌を歌って欲しいと言ひ、讚美歌を歌うと、「神は愛なり」と書いて天に召されたそうです。

宗次郎はそのような苦しみの中で、神様に祈りました。そして、彼は「御心がなりますように」とくじけることなく神様を信じ、忍耐強く正しいと思う道を愛をこめて進み神様に従い続けたのです。宗次郎は、その土地の人々に神様の愛を持って仕え、その土地で生きることを選びました。

牛乳配達と新聞配達のため一日40キロの配達の道のりを走りながら迫害する人々にキリストの祝福を祈りました。

10メートル走っては祈り、10メートル歩いては神に感謝をささげたという話しは有名です。

そして、子供に会うとアメ玉をやり、仕事の合間には病気の人のお見舞いをし、励まし、祈り続けました。

彼は雨の日も、風の日も、雪の日も休むことなく町の人達のために祈り、働き続けました。

彼は「でくのぼう」と言われながらも最後まで愛を貫き通したのです。

そして、1926年に彼は内村鑑三に招かれて、花巻を去って東京に引っ越すことになりました。

花巻の地を離れる日、誰も見送りには来てくれないだろうと思って駅に行くと、そこには、町長をはじめ、町の有力者、学校の教師、生徒、神主、僧侶、一般人や物乞いにいたるまで、身動きがとれないほど集まり、駅長は、停車時間を延長し、汽車

がプラットホームを離れるまで徐行させるという配慮をしたというのです。

実はその群衆の中に若き日の宮沢賢治もいたのです。この人こそ、東に病気の子供あれば行って看病してやり、西に疲れた母あれば、行ってその稲束を負いという宮沢賢治の詩にあるようなことを普通にやっていた人でした。

そういう宗次郎の生活ぶりを見ていた、宮沢賢治が、「こういう人になりたかった」という思いを込めて、「雨ニモマケズ」という詩を書いたのではとされています。』

+++

この人と今日の聖書の箇所がふしぎにダブって見えてきます。思うに、斎藤宗次郎という人は、パウロのこの文章を、その通りですとうなづきながら人生を走った人だと思ふのです。

@@@

この説教を誤解しないようにしてください。立派な人になりなさいという説教ではありません。頑張るって良いことに励みなさいという説教でもありません。

苦しいことはあるでしょう、悲しいことも、嘆くこともあるでしょう。誤解されることも、もしかしたら村八分になることだってあるかもしれません。でも、神の愛は私たちが離さない。神の愛は私たちを取り囲み、常にその絆の中に私たちを置いてくださるから、安心しなさいという説教です。

神様はあなたの苦悩を知っておられます。

あなたの重荷をご存知です。

でも、神様はあなたを孤独の中に置き去りにするようなことは決してなさいませぬ。祈りの中でいつでも応答し、いつでも慰めや励ましの言葉を持って私たちの心を訪れてくださいます。

そして、勝利は私たちのものだ。

私の愛は決してあなたを捨てず、見放すことはないと言ひさせていただきます。そこにこそ、私たちの希望があるのです。

祝福がありますように。